

花園大学
日本文学科
通信

第9号
通巻37号

二〇一六(平成二十八)年六月二十日発行
編集・発行 花園大学日本文学科
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八十一
TEL (〇七五) 八一一一五二八(代)
振替 〇一〇五〇一四三九九五

無題

真神 仁 宏

ここところ日本列島はどうなったのでしょうか。阪神淡路大震災の想像を絶する様子は何年経つても忘れることができません。あの日は義理の父が入院中で、家内と病室の前のソファで寝ずの番をしていた明け方のことでした。普段とは違うたならぬ下からの突き上げに、眠気が吹っ飛び慌てて病室に入りました。幸い看護士の適切な処置で大事には至りませんでした。家への電話は間もなく通じなくなりました。あれから20年ほどの間に、東北大震災と津波、広島での土砂災害、そして先日の熊本を中心にした九州地方の地震です。未だに余震が収まらず、目に見える家屋やライフラインの被害にとどまらず、被害を受けた人たちの精神的なストレスや変調を何とまでできないもどかしさが胸につかえます。一日も早い復興を心から念じております。

数年前の東北大震災の時でした。首都東京も多くの被害があり、通勤通学の足が奪われ、タクシ

ーに乗るための大行列が、あるいはいつ来るのかいつ出発するのかわからない列車を静かに待つ人の列がテレビに写っておりました。階段に座って待つ人が、他の人の邪魔にならないようにきれいに間を空けているのです。その画面を見たとき思わず涙がとめ度もなくあふれました。悲しい涙ではありません。うれしい涙でした。誇らしい涙でした。大震災の大変な時に不謹慎なようですが、世界中が日本人の節度や思いやりの心を報道で讃えました。日本つてすばらしい、日本人つてすばらしいと思いませんか。

月に二度ほど書の稽古にみえる老人が「先生のお寺には神社が奉つてありますね」と不思議そうにおっしゃいましたので「それはうちの寺の鎮守さんです」と答えました。すると「外国ならたちまち戦争ですね」と返ってきました。戦争にならないのは、日本には剣道や柔道、書道など多くの道という字のつく教育がありますからね、とにこっと笑われました。この老人は元文部大臣を務めておられ政界を引退後も、武道教育推進に活躍され、自らは書道を生涯の学習として頑張っておられます。

(本学客員教授)

日本文学会 公開講演会(聴講無料)

日時 六月二十五日(土)

午後一時三〇分～四時四〇分

会場 花園大学・自適館三〇〇教室

講演

「書く」ということ

— 書のかたち・書のみかた —

花園大学教授 下野 健児

宮沢賢治と鉄道

甲南女子大学教授 信時 哲郎

「まさか」の地震

菊池 政和

提婆達多は従兄釈尊の教団を自分の手中に収めたいと心から願っていました。釈尊の人望に嫉妬するとともに、自らの名利心が抑えきれなかったのです。修行者たちは釈尊の教えに導かれて集まっていたはずですが、提婆達多はその本当の意味に気がきません。

提婆達多は自らの神通力を利用して王舎城の太子・阿闍世の絶大なる信頼を得ます。ところが、天に咲く曼陀羅の花を見たいという阿闍世の要求に応えるため神通力を使い果たしてしまします。そこで釈尊の元に集まった教団のリーダーである舍利弗・目連を意のままに動かそうと企みました。釈尊のもとへ来た提婆達多の提案は次のようなも

のでした。「願わくは如来、この大衆をもつて我に付嘱せよ。我まさに種々に法を説きて、教化してそれを調伏せしむべし」。こんな大胆不敵な申し入れを釈尊が聞き入れるはずがありません。さらなる悪心を起こし、悪態をつく提婆達多に恐ろしいことが起きます。「大地震時に六反震動す。提婆達多、すなわちの時に地にたおれて、その身の辺より大暴風を出だして、もろもろの塵土を吹きてこれを汚空す」（涅槃經）。

提婆達多を襲つた大地震とは文字通りの地象異変をいうのではなく、人間としての大地が揺らいだことを示すのだと思います。人間を人間たらしめる、その足元が揺らいだ。名利心によつて私たちが人間性を失い、六道の埃にまみれた相をこそ、その激震に読み取るべきでしょう。

このたびの「熊本地震」の体験は「まさか、熊本でこんな大地震があるなんて」と叫ぶ自分を発見する機縁となりました。人生には三つの「まさか」がある。「上り坂」「下り坂」、もう一つは「まさか」だと。陳腐な譬えを嫌い、一度も口に出したことはなかったのですが、結局意識的に口にしなかつただけのことで、「まさかなあ」と思わず口に出す自分がいました。「まさか」とは「一抹の危惧の念はあるけれども、その可能性はまず無からう」（新明解国語辞典）という私の思い込みがその判断基準となつて発せられる言葉です。自分の漠然たる判断を基準にするあたり、釈尊に人を求めて法を見ることができなかつた提婆達多と自分とはあまり変わらないなあと思ひました。

（本学非常勤講師）

居心地の良い場所

宇田 丈宏

大学卒業後、18年勤めた職場を退職し、2年前に京都に戻つてきた。前職では大阪での勤務からスタートして福岡、東京、名古屋と転動して日本の大都市と呼ばれる街でそれぞれ数年生活したことになる。福岡時代はこの度の地震で大きな被害を受けた熊本にも何度も出張した。仕事の合間に駆け足で訪れた熊本城の崩れた石垣、記憶の中にある街並みが被害を受けている様子をニュースで目にするたびに心が痛む。そんな出張で数日滞在した街まで含めると随分あちこちの街を訪ねたと感慨深い。正直仕事に追われた日々でゆっくり観光を楽しんだ記憶は少ないがそれでもどの街も「住めば都」であつた。どこが一番良かったかと聞かれると困つてしまうが、今は学生時代を過ごした一番ではないかもしれない京都に腰を落ち着けようとしている。

現在の職場は京都駅前にある。毎日多くの観光客が賑やかに京都タワーをバックに記念撮影する姿を避けながら出勤し、金閣寺や清水寺へ向かう市バスは一日中満員だ。学生時代からあまり語学は得意ではなかつたが外国人に道を尋ねられると日本の「おもてなし」の心に傷をつけてはいけないとあたふたしながら対応している。最近ますます観光客が増え、もう受け入れるキャパシティも限界だろうと叫びたくなるが、まだまだ勢いは続きそうだ。そんな人であふれかえつた京都で過ご

す毎日だが、ふと静寂を感じる時がある。変化していく街並みに落ち着く場所を見つけたりする。社会に出て多少人生経験を積んだことで学生には見せてくれなかつた癖のある京都人や京都の街がちらつと素顔を見せてくれるようになったと思うこのごろである。

昨年、市民公開講座で恩師が講演されるというので久しぶりに花大を訪れた。母校は昔の面影を残しながら新しい建物も増え、綺麗になっていた。年甲斐もなくはいで校内を見て回り、恩師の講演も学生の時に受けた授業の何倍の集中力で拝聴した。卒業して訪れた母校は学生時代と変わらず居心地の良い場所であつた。

（平成六年度卒業生）



学舎に立つて思うこと

栗本 薫

私は花園大学卒業後、芸術科書道の時間講師としていくつかの高校で勤務をし、現在は京都の公立高校で非常勤の講師として、授業や校務分掌、書道の指導に従事しています。

一昨年の末、十数年振りに花園大学を訪れました。教員免許状更新講習受講のためでした。多くの新しい施設が建ち並び、どこか知らない大学へ来たような感覚にも陥りましたが、ゆつくりと見渡すとそこかしこに見慣れた風景が点在し、ここで過ごした四年間が懐かしくよみがえりました。

当時書道コースはまだ設置されておらず、書道と共に、曾根誠一先生のゼミに属して、中古文学を中心に国文学を学んでいました。書道と国語の教職課程を取ってはいたのですが、元来が人見知り何事にも自信が無く、教育実習の時期には、果たして自分は教壇に立つ立場になってよいのかと自問自答したことを思い出します。教職に就いてからも、経験の浅いうちは何もかもがうまくいっていない気がして、日々悩みながら過ごしていました。ある年の年度当初、ふと、例年よりは少し余裕をもって授業に臨んでいる自分に気がつきました。教壇に立ち始めてから十五年程も経った頃でした。教材に対して、生徒に対して、教職員に対して、様々な場面で物事を俯瞰的に見られるようになってきたと思います。

できた余裕は、余裕のままではなく、新たなこ

とを試みたり、別の壁に突き当たったりと、また余裕はなくなっていくのですが、日々研鑽することが、また新しい余裕を作り出すことになるのだと感じています。

また、なかなか全うはできませんが、「誠実に」生きることを常々心がけたいと思っています。生徒たちには最後の授業で、高校を巣立つて色々な人がいる社会に出た時に、周りに流されることなく、家庭や学校で培ってきた常識や、身につけたマナーを失うことなく、何事にも誠実に対応してほしいと話しています。

今回、母校で更新講習を受講したことは、試行錯誤しながら歩んできた、学生時代から現在までの道程を振り返る良いきっかけとなりました。

(平成四年度卒業生)

今思うこと

東内 志織

花園大学を卒業して早3ヶ月目を迎えようとしています。書道コースで学生生活を送っていた数ヶ月前の事が、今ではとても懐かしく感じます。

在学中は書道部に所属していたので、ほぼ毎日閉門まで残りひたすら自分が追い求めていた書の形を描く為に奮闘していました。なかなか成果が出ず苦労した時もありましたが、その時間はとても充実していました。だからこそ、最後に自身も驚くような「大きな花」を咲かすことが出来たのだと思います。また、書道を詳しく学ぶにつれて、

書道の教員に憧れを持つようになり、より教職課程の授業に身が入りました。「筆離れが進んでいるからこそ、授業で書道の楽しさを知ってほしい。」その思いが年々強くなったことを覚えています。

このように頑張れたのも、この大学に書道を学ぶ最高の環境が整っていたからです。花園大学の書道コースには理論・技術、全てにおいて指導いただける屈指の先生方、そして研究室には教えきれないほどの蔵書が揃っています。このことは、卒業後も実感する程です。そして、4年間共に過ごしてきた仲間がいたからこそ、切磋琢磨しながら集大成の「卒業制作展」を成功させることが出来ました。かけがえない友達と出会えたこと、そして書道と向き合えたことは、私にとって大きな財産となりました。

現在は書から離れ、一般企業に就職しています。全く異なる職種である為、学んだことをすぐに活かせることには少し物足りなさを感じています。しかし、目まぐるしく毎日が過ぎていくので、まだまだ余裕はありません。徐々に落ち着いてきたら筆を取り、自分のペースで書が続けて行きたいと考えています。ゆくゆくは書の道に戻り、大学で学んだことを私なりに周りに伝えて行けるようになります。これを今後の夢として、まずは今進んでいる道を1歩1歩大切に、努力を続けて行きます。

(平成二十七年卒業生)



日々禅力

山口 龍輝

高校生の時、様々な勉強がある中で特に古典文学に興味があり、いつしか自分も数多くの物語の発祥の地「古京都」で学びたいと強く思うようになった。自分がこよなく愛した古典を、好きになるきっかけを与えてくださった高校の恩師が進学の際に薦めたのが、花園大学だった。数ある京都の大学の中で、恩師が何故花園大学という学校を勧められたのか、初めはさっぱりわからなかった。恩師に勧められるがままに花園大学のオープンキャンパスに参加した。その中で真っ先に花園大学は先生と生徒の関係が特徴的だと思った。オープンキャンパスに行つたどの大学よりも、花園大学は生徒と先生の距離がとても近く、柔らかいものを感じたのだ。それは決して礼儀を欠くとか、そういったことではなくて、親しき仲にも礼儀があり、その上で築かれた信頼関係なのだと感じられた。ここまで先生方が生徒に対して優しく接してくれる大学は他に無いと思い、入学することを決めた。

必修科目の一つである禅学では、早朝座禅を体験することができた。普段、喧騒の中で過ごす日々から一転して、ただ落ち着いてそこに座る。そうして目を閉じると頭の中はどこまでも冴え渡り、その中で自己を見つめ直す時間となった。ただ何も考えずに座ることの難しさや、自己探求をする意味を禅学の中で学べた。

大学に入って初めて「日本語学」というものに触れ、その魅力に心惹かれた。知識を身につけ、研究をしてゆく中で、日本語についてもっと深く知りたい、自分の研究テーマを広げていきたいと思うようになり、大学院に進学することを決めた。

部活動の面においても、積極的に参加した。せっかく京都に来たのだからと、大学に入った時点で茶道部に入ろうと考えていた。特に花園大学の茶道部は臨済宗と深く結びついており、掛け軸には妙心寺の元管長が書かれた禅語などが多くある。そういったところから禅の心に触れることもでき、今では自分の生きていく中で道標として思い返す言葉も少なくない。

そんな多くを学んだ花園大学を卒業して、今関西大学大学院へと進学し、自分が推し進めていきたくった「日本語学」について研究している。偶に行き詰まることもあるが、花園大学で学んだ多くのことや、自分を支えてくれた先生方や友人が、乗り越える力を与えてくれるのだ。

(平成二十七年卒業生)

『花園大学 日本文学論究』第八号

(二〇一五年二月刊)

『竹取物語』「病み臥す貴公子」図を読む

——御行と麻呂足を識別する象徴を

手懸かりとして——

曾根誠一

・古本説話集注釈 上巻第三話・第四話

・受贈図書目録 新聞水緒

(平成二六年一〇月〜同二七年九月)

*入手希望の在学生は、共同研究室(日本文学・書道)で申し出て下さい。

*購読をご希望の卒業生及び一般の方は、日本文学科宛にご連絡下さい。

編集後記

*ご多忙の中、ご執筆いただきました皆様方に、衷心より篤く御礼申し上げます。ありがとうございました。

*特に、熊本県南阿蘇村に居住され、震度七の激震を体験された菊池政和先生には、お住まいに大きな被害はなかった旨伺いましたが、余震の続くご辛勞多き折にご執筆いただきましたこと重ねて御礼申し上げますとともに、お見舞い申し上げます。

(曾)

